

看護学生の看護系大学への進学志望動機の検討

竹本由香里¹⁾

キーワード：大学進学動機、看護系大学、看護学生

要 旨

本研究の目的は、看護学生の看護系大学への進学志望動機について検討することである。調査対象は3つの大学に所属する1年次看護学生228名で、大学への進学志望動機と看護学校および他学部の受験状況についての自記式質問紙調査を実施した。

看護系大学への進学志望動機22項目を因子分析した結果、6因子（ゆとり、看護志向、大学の経済価値、学力、消極的動機、他者の勧め）が見出された。性別、看護学校及び他学部の受験状況、看護体験の有無により各因子得点を比較した結果、看護学校を受験したものと看護体験のあるものは、「看護志向」の因子得点が有意に高かった。一方、他学部を受験したことのあるものは「看護志向」の因子得点が有意に低かった。性別では、女性が男性よりも「大学の経済価値」の因子得点が高かった。

Nursing Students' Motivations for Entering University

Yukari Takemoto¹⁾

Key words：motivation for entering university, nursing department, nursing students

Abstract：

The purpose of this study was to examine nursing students' motivations for entering university. The participants in this study were 228 first-year students in the nursing departments of three universities. They were asked to fill out a questionnaire about their motivations for entering their particular university and whether they had taken the entrance examinations for another school.

Responses to the 22 items in the motivation section were examined by factor analysis. The results showed that the students' motivations could be grouped into six categories: length of course, nursing-oriented, quality of the university, individual academic record matches university level, social influence, and recommendation by another person. The factor scores were compared by sex, nursing experience, and whether the participant had taken the entrance examination for nursing school and/or another department. The students who took the entrance examination for nursing school and the students who had had experience with nursing scored significantly higher in the category "nursing-oriented", whereas the students who took the entrance examination for another department scored significantly lower. Female students scored significantly higher on "quality of university" than male students.

1) 宮城大学看護学部 (Miyagi University)

I. はじめに

平成19年版文部科学省の文部科学統計要覧¹⁾によると、平成18年の大学・短期大学等への現役進学率は男子48.1%、女子50.6%（計49.3%）であり、大学入学志願率だけをみると男子57.2%、女子42.6%（計50.0%）と現代では高校卒業者の半数が大学進学を志望している現状である。安達²⁾は、大学進学過程に関するこれまでの研究について進学動機を2つの段階に区分して論じている。1つは、就職するのかそれとも大学へ進学するのかを決定する段階、他の1つは、特定の大学・学部・学科を選択する段階である。大学への進学志望動機に関する研究では、湧上³⁾が高校3年生を対象として大学への進学志望動機の調査を行い、「大学の本来的功能」「家族への配慮と規範機能」「モラトリアム機能」「大学の副次的機能」「大学の経済価値機能」の5因子を抽出した。また、古市⁴⁾は10学部（教育系・文学系・法経系・理工農系・医歯薬系）にわたる大学1・2年生を対象として大学進学動機の分析を行い、「無目的・同調」「享楽志向」「勉強志向」「資格・就職」の4因子を抽出して学系による差を検討し、教育系と医歯薬系の方が資格・就職志向が強いことが示された。他に、八木ら⁵⁾も高校生を対象とした大学選択動機の調査を行い、「社会的地位」「得意分野」「無目的・漠然」「エンジョイ」「専門・資格」の5因子を見出しており、ほぼ対応した結果が出ている。

看護系大学に視点を移してみると国公立大学の再編・統合が進む中、看護基礎教育では大学が10校の時代が長く続いていたが、平成19年4月現在、その数は157校になり、教育制度としてめざましい発展を遂げている。これまでも看護職志望動機に関する研究^{6)~8)}は報告されているが、看護系大学への進学志望動機に関する研究は数が少なく、「看護を選択した動機」「本学への進学動機」というかたちで調査が行われている^{9),10)}。学部において特定の職業に就くための教育が行われる教育系、医歯薬系の学部ではそれぞれに資格取得に必要なカリキュラムが組まれており、実際にその職業に就く学生も多い⁴⁾。看護学系大学でも同じように、保健師助産師看護師学校養

成所指定規則に基づいたカリキュラムが組まれており、卒業生のほとんどが看護職として就職する。これまでも、看護専門学校・医療短期大学等に入学する学生は看護職に就くことを前提として入学してくると考えられていた。しかし、看護系大学が150校を超えた今、看護職志望の高校生にとって看護系大学が大きな選択肢の一つとなっているのも事実であるが、その一方で、少数ではあろうが看護職志望とは別に大学進学を志望する学生の「特定の大学・学部・学科を選択する段階」の選択肢の一つとなっていることも考えられる。これは、看護系大学へ入学しても、他学部受験や進路再考のために休学・退学する学生が皆無ではないことから推測される。

教育系の学生は「資格・就職」志向が強いとの報告⁴⁾もあるが、若松ら¹¹⁾は教員養成課程に入学してくる学生は教職を目指す学生ばかりではなく、彼らを一枚岩的な存在としてみることにほもはや無理があると述べ、教職志望意識の変化に及ぼす要因の検討を行っている。18歳人口の減少とともに、進学志願者すべてが進学可能である大学全入時代が訪れると叫ばれて久しいが、看護学部においても入学してくる学生すべてが入学当初から看護職を目指しているとは限らない。しかし、看護系大学入学後に他学部受験や進路再考のために休学・退学する学生がいるのと同じように、入学時に看護職を志望していなかった学生が看護職に就くことを決意する時期でもある。学生の看護系大学への進学志望動機を明らかにすることは、今後の大学における教育方法や内容を検討するための示唆を得るだけではなく、看護職としてのキャリア発達の構造を検討するための一資料になると考える。

一般的な大学進学過程と異なる点として、看護系大学への進学過程を次の2つに分類できると推測する。1つは看護職を志望している学生が看護を学ぶ場として大学を選択する場合、もう1つは大学進学を志望し、特定の大学・学部・学科を選択するときのひとつの選択肢として看護系大学を選択する場合である。本研究では、まず看護系大学への進学志望動機の構造を明ら

かにし、一般大学への進学志望動機との比較を行う。そして、看護専門学校・他学部（他学科）との併願状況が看護系大学への進学志望動機に影響を及ぼすのかを検討することを目的とする。

Ⅱ. 研究方法

1. 予備調査

平成15年12月にA大学看護学部1年生を対象とし、「看護系大学への進学志望動機」について質問紙調査を実施し、自由記述による回答を求めた。回答は任意であり内容によって今後の学習に影響を及ぼさないことを質問紙にも明記した上で、趣旨と匿名性の保持について説明した。88名に配布し、80名より回答を得た（回収率90.9%）。また、面接調査に協力することを承諾した学生12名と半構成面接を行い、進学決定過程に関するデータを補足した。その結果、一般大学への進学動機とは異なる特徴として、看護職に就きたいという「明確な看護職志望」と、保健師・養護教諭の資格も取れる、幅広い知識を身につけたいという「看護を学ぶ場としての大学選択」があった。

2. 本調査

1) 調査対象および方法

対象はM県内の3つの看護系大学に在籍する1年次学生228名である。調査期間は平成18年11月～12月で、A・B大学は集合法、C大学は郵送法による無記名自記式質問紙調査を実施した。170部を回収し、回収率は74.6%であった。対象者の属性は、女性153名（90.0%）、男性17名（10.0%）、平均年齢は19.08歳（SD 1.46）であった。

2) 質問紙の構成

(1) 看護系大学への進学志望動機に関する項目

予備調査で得られた結果と、先行研究^{3～5)}を参考に進学志望動機に関する質問項目27項目を筆者が作成し、各項目について「全くそう思わない（1点）」から「とてもそう思う（5点）」の5段階評定で回答を求めた。

(2) 看護専門学校受験の有無

「看護専門学校を受験したことがある、また

は受験を考えたことがありますか」との問いで、「ある」「ない」で回答を求めた。また、入学前の看護志向の程度を把握するために看護体験の有無についても「病院や施設で看護体験を経験したことがありますか」との問いで、「ある」「ない」で回答を求めた。

(3) 他学部受験の有無

「看護以外の学部または学科を受験したことがありますか」との問いで、「ある」「ない」で回答を求めた。

(4) 現在考えている大学卒業後の進路

「あなたは大学卒業後にどのような職業につきたいと考えていますか」との問いで、1～4の選択肢から1つ回答を求めた。選択肢は、「看護職（看護師・保健師・助産師）」「養護教諭」「看護職以外」「未定」である。さらに、「看護職」「看護職以外」を選択したものには具体的職業についての回答を求めた。

3. 倫理的配慮

調査の実施にあたっては、研究の目的、協力を拒否しても不利益は生じないこと、質問紙は無記名で得られたデータはコンピューターで処理し大学名や回答者の特定ができないことなどを口頭および紙面で説明した。研究協力の意思は、質問紙の回収をもって調査協力の同意を確認するとした。

Ⅲ. 結果

1. 看護系大学への進学志望動機の因子分析

各項目の回答が肯定的に考えているほうから得点が高くなるように5～1点を与えて得点化し、主因子法による因子分析（プロマックス回転）を行った。各項目のうち共通性が0.2未満の3項目と、すべての因子において因子負荷が0.35に満たなかった2項目を除き、再度同様の分析を行ったところ、固有値1.0以上の因子が7つ認められた。固有値の減衰状況と因子の解釈可能性を考慮して因子数を6とし、最終的に22項目の分析を行い、因子負荷量が0.35以上のものを因子としてまとめ、得られた因子について解釈を行った。第1因子は「一般教養の勉強がしたかっ

た」「大学生活を楽しみたかった」という項目の負荷量が高く『ゆとり』、第2因子は「専門的に看護学を学びたかった」「看護職を目指そうと思った」という項目の負荷量が高く『看護志向』、第3因子は「大学卒のほうが給料が高いと思った」「見栄のため」という項目の負荷量が高く『大学の経済価値』、第4因子は「受かりそうな大学・学部を選んだ」「成績が一致した」という項目から『学力』、第5因子は「大学で勉強がしたかった」「大学に行くのは当たり前だと思っていた」「とりあえず大学に入学したかった」という項目から『消極的動機』、第6因子は「家族や親類に医療職がいた」「親や親族に勧められた」という項目から『他者の勧め』と命名した(表1)。

2. 看護系大学への進学志望動機の各因子得点の比較

性別、看護学校との併願、他学部との併願、看護体験の有無別に因子得点を求め、それぞれ2群間の差をt検定により分析した。自由度が163でないものは、2群の等分散性が棄却され、ウェルチの方法によって検定されたものである。

1) 性別による差(表2)

第3因子『大学の経済価値』で女性の方が有意($t(163)=2.439, p<0.05$)に因子得点が高かったが、そのほかの因子では有意差はなかった。

2) 看護専門学校との併願状況による差(表3)

看護専門学校を受験した、受験を考えたことがあったものは82名(48.2%)であり、約半数の学生が看護学校と併願、または併願を検討していた。第2因子『看護志向』では看護専門学校を受験した、または受験を考えたことのあるものの方が有意($t(148.2)=3.027, p<0.01$)に因子得点が高く、第5因子『消極的動機』では受験を考えたことのないものの方が有意($t(147.2)=2.485, p<0.05$)に因子得点が高かった。また、第4因子『学力』では看護専門学校を受験した、または受験を考えたことのあるものの方が因子得点が低い傾向にあった($t(163)=1.750, p=0.082$)。

3) 他学部との併願状況による差(表4)

他学部を受験したことがある学生は50名(29.4%)であった。第2因子『看護志向』で他学部を受験したものの方が有意($t(57.2)=$

表1 「看護系大学への進学志望動機」項目の因子分析結果(プロマックス回転後の因子パターン)

質問項目	平均値(SD) 得点 1~5	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
一般教養の勉強がしたかった	2.80 (1.21)	0.811	-0.100	-0.101	-0.024	-0.121	-0.177
大学生活を楽しみたかった	4.07 (1.03)	0.590	0.026	-0.046	-0.056	0.143	0.157
大学でサークル活動やバイトがしたかった	3.20 (1.28)	0.506	0.035	0.271	0.055	0.012	-0.073
大学に憧れていた	3.62 (1.23)	0.456	-0.009	0.070	-0.046	0.27	0.122
大学卒業後の選択肢が増えると思った	3.88 (1.15)	0.443	0.144	0.069	-0.003	-0.09	0.126
ゆっくり勉強がしたかった	3.24 (1.19)	0.442	0.074	0.012	0.129	-0.095	-0.032
専門的に看護学を学びたかった	4.01 (1.03)	-0.060	0.789	0.026	-0.103	0.105	0.143
看護職を目指そうと思った	4.39 (0.99)	0.016	0.650	0.129	-0.093	-0.154	0.079
多くの知識を身につけたかった	4.51 (0.72)	0.272	0.543	-0.208	0.027	0.168	-0.076
医療系の学部に進みたかった	4.46 (0.85)	-0.010	0.394	0.114	0.169	-0.019	-0.088
大学卒のほうが給料が高いと思った	3.49 (1.27)	0.010	0.117	0.913	-0.028	-0.061	-0.069
見栄のため	2.20 (1.24)	0.113	-0.094	0.485	0.147	-0.093	-0.114
将来の就職に有利だと思った	4.08 (0.96)	-0.171	0.137	0.462	0.094	0.085	0.225
受かりそうな大学・学部を選んだ	3.36 (1.28)	-0.021	-0.149	0.138	0.651	-0.019	-0.013
入学した大学・学部と自分の成績が一致した	2.94 (1.23)	0.196	-0.012	-0.098	0.620	-0.037	0.326
進学校に在籍していた	3.85 (1.23)	-0.067	0.220	0.078	0.515	0.293	-0.088
大学で勉強がしたかった	4.61 (0.71)	-0.045	0.212	-0.131	0.008	0.680	-0.225
大学に行くのは当たり前だと思っていた	3.25 (1.44)	-0.033	-0.123	0.030	0.197	0.665	-0.129
とりあえず大学に入学したかった	2.86 (1.40)	-0.046	-0.281	0.037	-0.050	0.561	0.248
家族や親類に看護師や医師などの医療職がいた	2.51 (1.72)	-0.155	0.115	-0.236	0.186	-0.201	0.594
親や親族に勧められた	2.59 (1.37)	0.061	-0.051	0.098	-0.124	-0.008	0.568
高校までの教師に勧められた	2.52 (1.31)	0.120	0.043	0.145	0.063	-0.111	0.352
因子相関行列							
第1因子「ゆとり」		1.000					
第2因子「看護志向」		0.239	1.000				
第3因子「大学の経済価値」		0.288	0.019	1.000			
第4因子「学力」		0.156	-0.121	0.218	1.000		
第5因子「消極的動機」		0.502	-0.017	0.463	0.310	1.000	
第6因子「他者の勧め」		0.425	0.210	0.460	0.144	0.479	1.000

表2 性別による因子得点の比較

因子	ゆとり	看護志向	大学の経済価値 *	学力	消極的動機	平均値 (SD) 周囲の勧め
女性 (n=148)	0.018 (0.90)	0.014 (0.93)	0.057 (0.88)	0.014 (0.82)	0.029 (0.87)	0.011 (0.82)
男性 (n=17)	-0.158 (0.80)	-0.123 (0.60)	-0.501 (0.95)	-0.122 (1.10)	-0.254 (0.95)	-0.104 (0.24)

*: $p < 0.05$

表3 看護学校併願の有無による因子得点の比較

因子	ゆとり	看護志向 **	大学の経済価値	学力 †	消極的動機 *	平均値 (SD) 周囲の勧め
あり (n=80)	-0.035 (0.87)	0.211 (0.69)	-0.016 (0.86)	-0.119 (0.91)	-0.174 (0.98)	0.046 (0.91)
なし (n=85)	0.033 (0.92)	-0.199 (1.02)	0.015 (0.95)	0.112 (0.78)	0.164 (0.74)	-0.043 (0.77)

*: $p < 0.05$ **: $p < 0.01$ †: $p < 0.1$

表4 他学部併願の有無による因子得点の比較

因子	ゆとり	看護志向 **	大学の経済価値	学力	消極的動機	平均値 (SD) 周囲の勧め
あり (n=48)	-0.077 (0.97)	-0.487 (1.23)	-0.059 (0.96)	0.168 (0.89)	0.103 (0.85)	-0.149 (0.82)
なし (n=117)	0.031 (0.86)	0.199 (0.62)	0.024 (0.88)	-0.069 (0.83)	-0.042 (0.88)	0.061 (0.84)

**: $p < 0.01$

表5 看護体験の有無による因子得点の比較

因子	ゆとり	看護志向 **	大学の経済価値	学力	消極的動機	平均値 (SD) 周囲の勧め
あり (n=90)	0.097 (0.79)	0.193 (0.64)	0.096 (0.85)	-0.076 (0.87)	0.001 (0.89)	0.08 (0.73)
なし (n=75)	-0.116 (1.00)	-0.231 (1.09)	-0.116 (0.96)	0.092 (0.82)	-0.001 (0.87)	-0.096 (0.95)

**: $p < 0.01$

3.663, $p < 0.01$) に因子得点が低かったが、そのほかの因子では有意差はなかった。

4) 看護体験の有無による差 (表5)

看護体験を経験したことがある学生は91名 (53.5%) であった。第2因子『看護志向』で看護体験を経験したものの方が有意 ($t(114.7) = 2.953$, $p < 0.01$) に因子得点が高かったが、そのほかの因子では有意差はなかった。

3. 卒業後の希望進路について

大学卒業後に看護職を希望しているものは131名 (77.1%)、養護教諭は18名 (10.6%)、看護職以外は10名 (5.9%)、未定は11名 (6.5%) であった。看護職を希望している131名の内訳 (複数回答) は看護師109名、保健師53名、助産師39名、未定2名であった。看護職以外を希望しているもので、具体的な職業が決まっていると回答したものは9名で、その具体的な職業は医師3名、臨床心理士、臨床美術士、研究職、セラピスト、看護学と栄養学を活かせる職業各1名、無回答2名であった (図1)。

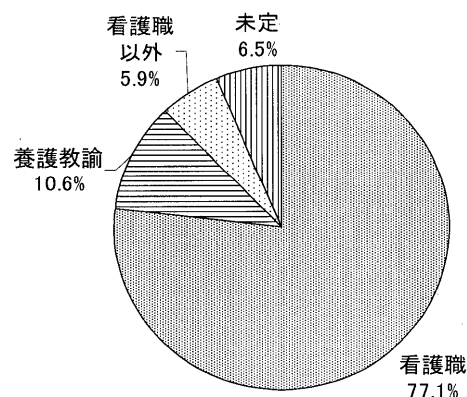


図1 卒業後の希望進路

IV. 考察

1. 看護系大学への進学志望動機について

本研究では、看護系大学への進学志望動機の構造がどのようになっているのかを明らかにするために、予備調査と先行研究を参考に作成した質問項目への回答について因子分析を行った。その結果、『ゆとり』『看護志向』『大学の経済価値』『学力』『消極的動機』『他者の勧め』の6つ

の因子が抽出された。

第1因子の『ゆとり』には、³⁾の大学で多くの人に知り合いたい、クラブ活動をやりたいという「大学の副次的機能」や古市⁴⁾の交友関係を広げたいから進学した「享樂志向」にあたると思われる項目が含まれている。しかし、「一般教養の勉強がしたかった」「ゆっくり勉強がしたかった」という項目も含んでおり、看護専門学校との併願を考えたものが約半数いることから、この因子は看護専門学校との比較によって現れたものと考えられる。「一般教養の勉強がしたかった」という項目は³⁾の専門的知識を深めたい、広く教養を身につけたいという「大学の本来の機能」にも該当すると考えられ、専門学校で専門的な知識を習得するだけではなく広く教養を身につけたいという希望があると考えられる。また、「ゆっくり勉強がしたかった」という項目は、看護専門学校に進学した場合に3年で卒業するところを、大学では4年間かけて勉強するという、時間的なゆとりを期待しているものと思われる。「大学に憧れていた」という項目は第5因子『消極的動機』に含まれることが予測されたが、この項目も看護を学ぶ場として看護専門学校ではなく看護系大学を志望した理由としてこの因子に含まれたと考えられた。

第2因子の『看護志向』は、看護系大学への積極的な進学志望動機である。学問としての看護学を学び、看護職に就くことを目指しているものであり、前述の「大学の本来の機能」や古市⁴⁾の専門的知識・技能の習得や教養を高めることを目的として進学した「勉学志向」、資格の取得や有利な就職を目的として進学した「資格・就職」にあたると思われる。佐藤¹²⁾は音楽大学への進学理由に関する研究を行い、³⁾の「大学の本来の機能」にあたるものが「将来展望」「能力活用」「同一視」の3因子に分かれ、これは入学以前から音楽を専門としていることで、この分野の特徴が現れたものと考察している。本研究では、第1因子が³⁾の「大学の本来の機能」と「大学の副次的機能」が組み合わせられた形で抽出され、第2因子において「大学の本来の機能」の専門性が際立った形で抽出された。看護

系大学の場合は、卒業後の進路や将来的な展望が入学時点である程度定められること、看護職を志望するときの進学先として看護専門学校（または看護短大）と大学のような複数の選択肢がある特徴がこのような結果として現れたと考えられる。

第3因子の『大学の経済価値』、第5因子の『消極的動機』、第6因子の『他者の勧め』はこれまでの一般的な大学進学動機研究で見出された因子と対応するものであった。第4因子の『学力』は安達²⁾の理科系大学への大学選択動機の「学力」因子に対応する。³⁾、古市⁴⁾らの研究は一般的な大学への進学動機を調査したものであり、学力や成績に関する項目は含まれていなかった。しかし、看護専門学校か看護系大学の選択、どの学部に進学するかを選択、どの看護系大学に進学するかを選択、いずれの場合においても成績や合格可能性などを検討しないわけにはいかないことを反映している結果と考える。

2. 看護専門学校、他学部（学科）との併願状況による進学志望動機の比較

看護系大学への進学志望動機の『看護志向』で、看護学校との併願の有無、他学部・他学科との併願の有無、看護体験の有無において有意な差が見られた。看護専門学校を受験した、あるいは受験することを考えたことのある学生は約50%であり、看護学校との併願を考えたことのないものよりも有意に『看護志向』の因子得点が高かった。『看護志向』は看護系大学への積極的な進学志望動機というだけではなく、看護を選択した動機でもある。看護学校との併願を考えたことのある学生は、入学前より看護学を学ぶ意思が明確であり、看護を学ぶ場として看護系大学を選択して入学してきたと考えられる。看護体験の有無においても、大学入学以前に看護体験を経験したことのある学生が約50%であり、経験のないものよりも有意に『看護志向』の因子得点が高かった。看護体験を行うということは、看護に対する興味・関心を以前より持っていることが考えられ、先述と同様の理由が推

測される。看護師等学校養成所に入学した看護学生を対象とした調査¹³⁾では、32%の学生が看護体験を経験しており、看護系大学に在学している看護学生を対象とした調査¹⁴⁾では、約50%が病院や施設で行われる看護体験を経験し、約42%の学生が看護学校1日体験入学に参加したとの報告がある。いずれも看護体験を経験することで、目標の明確化や受験の決定、看護への興味・関心を強める影響があるとしている。

一方、他学部を受験したことのある学生は約30%であり、受験したことの無いものよりも有意に『看護志向』の因子得点が低かった。他学部を受験するということは、看護学を学ぶ希望はあるが、卒業後の見通しとして看護職を志望する意思がまだ明確ではないと考えられる。専門学校・短期大学・大学の看護学生の学習意欲の比較検討をした調査¹⁵⁾では、専門学校生が他の群よりも看護に対する明確な目標を持っており、大学生が他の群よりも大学に対する志向が強かった結果から、大学生は大学へ進学することを第1志望として入学してきたことが影響していると考察している。本研究でも他学部を受験したことがあるものは、一般的な大学への進学志望動機に対応する因子(『大学の経済価値』『学力』『消極的動機』『他者の勧め』)では有意差がなく、看護系大学への積極的な進学志望動機である『看護志向』でのみ因子得点が低かった。このことから、看護系大学に入学してくる学生の中には、大学へ進学することを第1志望とし、特定の大学・学部・学科を選択する次の段階の選択肢として看護系大学を志望した学生がいることが明らかになった。しかし、本研究では受験した学部の種類を問う質問を設定していなかったため、保健医療福祉系の学部間での選択なのか、異なる分野間での選択かを検討するには至らなかった。

『大学の経済価値』では性差があり、女性のほうが因子得点が有意に高かった。看護職を選択する場合、国家資格を有することが公的制度に保証され、経済的にも安定していることから、女性でも経済的に自立できることが理由のひとつと考えられている^{6,10,15~17)}。また、医療系大学

及び大学院に対する高校生の意識に関する研究では、4年制大学へのこだわりを調査し「就職に有利な資格を取得できる学部に対する女子高校生の期待は高いと思われる」¹⁸⁾と述べている。よって経済的な自立という点で、女性が男性よりも大学に進学することの経済価値をより意識していることが推測される。

『消極的動機』では看護学校との併願の有無によって差があり、看護学校の受験を考えたことのない学生のほうが有意に因子得点が高かった。これは、看護専門学校への進学を検討するほど将来的な職業として看護職を目標とする明確な意思をもっておらず、漠然と大学へ進学することを希望していたと考えられる。

3. 研究の限界と今後の展望

本研究は1つの県内にある看護系大学を対象として調査したものであり、地域性が反映していることも推測され看護系大学への進学志望動機として一般化するには限界がある。今後、進学志望動機を踏まえた研究を進めていくには、対象地域を拡大しながら信頼性・妥当性の検討を重ねていくことが課題となる。

今回の結果から看護系大学に入学してくる学生のすべてが、必ずしも看護職になることを志望しているとは限らないことが明らかとなった。しかし、卒業後にほとんどの学生は看護職を志望し、または看護学を学んだことを基盤として社会で活躍している。看護学生時代は看護職に必要な能力を習得するだけでなく、臨地実習での経験や他者との関わり(教員、実習指導者、患者など)を通して卒業後の進路や将来の展望を探索していく時期でもある。看護職としてのキャリア発達は看護学生時代に始まっていると考えられ、今後は看護学生をも含めた看護職のキャリア発達やキャリア形成支援についても研究を進めていきたい。

V. まとめ

看護系大学への進学志望動機について検討するために1年次看護学生228名を対象に自記式質問紙調査を実施し、以下の結果が得られた。

1. 看護系大学への進学志望動機22項目を因子分析した結果、『ゆとり』『看護志向』『大学の経済価値』『学力』『消極的動機』『他者の勧め』の6因子が見出された。
2. 看護学校を受験したことのあるもの（または受験を検討したもの）と看護体験の経験のあるものは、ないものよりも有意に『看護志向』の因子得点が高かった。一方、他学部を受験したことのあるものは、ないものよりも有意に『看護志向』の因子得点が低かった。
3. 女性は男性よりも有意に『大学の経済価値』の因子得点が高かった。

謝 辞

本研究を行うにあたって調査にご協力いただきました学生の皆様、ならびに大学関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 文部科学省：文部科学統計要覧平成19年版。pp.66-69, 国立印刷局, 東京, 2007
- 2) 安達智子：理科系大学1年生の大学選択動機と入学後の適応について－就職動機志向による比較－。進路指導研究, 19(2), 22-29, 1999
- 3) 渕上克義：進学志望の意思決定過程に関する研究。教育心理学研究, 32(1), 59-69, 1984
- 4) 古市裕一：大学生の大学進学動機と価値意識。進路指導研究, 14, 1-7, 1993
- 5) 八木晶子・齋藤貴浩・牟田博光：高校生の大学進学志望動機と進学情報の有用度との関連に関する分析。進路指導研究, 20(1), 1-8, 2000
- 6) 竹本由香里：看護職における職務満足感と職業継続意志に関する研究。進路指導研究, 21(2), 1-10, 2003
- 7) 御子柴裕子・北山三津子・安田貴恵子他：長野県立大学における保健婦・士志望動機の実態。長野県看護大学紀要, 3, 71-80, 2003
- 8) 河村彰美・藤田淳子・種池礼子：看護学生の看護婦志望理由・学習進度が看護婦のアイデンティティ形成に及ぼす影響。看護展望, 25(9), 1065-1070, 2000
- 9) 横山美樹・岩井郁子・太田喜久子他：聖路加看護大学入学生の看護ならびに本学の選択動機。聖路加看護大学紀要, 22, 72-80, 1996
- 10) 中谷信江・木戸久美子・林隆：山口県立大学看護学部生の進学動機について。山口県立大学看護学部紀要, 10, 15-19, 2006
- 11) 若松養亮・古川津世志：教員養成学部学生における教職志望意識の変化に及ぼす要因の検討。進路指導研究, 17(2), 19-29, 1997
- 12) 佐藤典子：音楽大学への進学理由の認知と進学後の適応について。教育心理学研究, 49(2), 175-185, 2001
- 13) 山口美晴・美座紘子・下西澄江他：ふれあい看護体験が受験動機に及ぼす影響－看護学生へのアンケート調査より－。第34回日本看護学会論文集（看護総合）, 66-68, 2003
- 14) 淘江七海子・吉本知恵・竹内美由紀他：看護学科受験生への大学説明会の内容の検討－看護学校1日体験入学高校生と大学在学学生へのアンケートから－。香川県立保健医療大学紀要, 2, 179-186, 2005
- 15) 永嶋由理子：看護学生の学習意欲の比較検討－専門学校・短期大学・大学の看護学生について－。山口県立大学看護学部紀要, 6, 37-44, 2002
- 16) S. Boughn, A. Lentini: Why do Women Choose Nursing?. Journal of Nursing Education, 38(4), 156-161, 1999
- 17) M.K. Rognstad, O. Aasland: Change in career aspirations and job values from study time to working life. Journal of Nursing Management, 15, 424-432, 2007
- 18) 平野（小原）裕子・東田善治・梅村創他：医療系大学及び大学院に対する高校生の意識に関する研究。九州大学医学部保健学科紀要, 1, 59-70, 2003